



フレデリック

レオ・レオニ 作 谷川 俊太郎 訳

好学社 1969年 1529円

1冊 28×23cm

冬をのりきるために、昼も夜もたべものを集める野ねずみたち。そんな仲間たちの横で、じっとしているフレデリックは、なにを言われても「ぼくは おひさまの ひかりを あつめてるんだ」「いろをあつめているのさ」「ことはをあつめてるんだ」と動こうとしません。しかし、冬がきて仲間たちが元気をなくした時、みんなを勇気づけたのはフレデリックが貯えておいた言葉だったのです。野ねずみと一緒に、きんいろの光やいろいろな色を感じてください。

レオ・レオニは作り出す絵本ごとに、登場人物に最もふさわしい形式を使用します。この貼り絵で描かれた世界は詩的な雰囲気が漂っています。言葉が持つ力を改めて感じさせてくれる絵本です。



ペレのあたらしいふく



エルサ・ベスコフ さく・え

おのでら ゆりこ やく

福音館書店 1976年 1155円

16ページ 25×32cm

ペレの服が小さくなりました。ある日、ペレは自分のひつじの毛をかりとります。おばあちゃんに毛をすいてもらう代わりに畑の草取りをし、ペンキやさんのお使いをして糸の染め粉を買い、おかあさんに布を織ってもらう代わりに妹の面倒をみ、仕立て屋さんに服を作ってもらう代わりに家の手伝いをしました。そしてついにペレの服が出来上がります。

淡々とした展開の中に、ペレのひたむきさや、服が出来上がるまでの過程、労働の対価など、さまざまな要素が込められていて、社会の一部を覗くことができます。さまざまな年齢の子が読んでも、それぞれ何かを感じ取れる絵本といえます。

